字調査報告　東仲宗根編

宮古島市総合博物館　学芸係

〈目次〉

はじめに
字の概況
１．東仲宗根の歴史・・・・・・・久貝かおり、寺﨑香織、與那覇史香
２．地域を歩く・・・・・・・・・寺﨑香織
３．盛加が一の自然・・・・・・・砂川奈美子、久貝かおり
４．現代東仲宗根の作家たち・・・新田由佳、砂川奈美子
おわりに

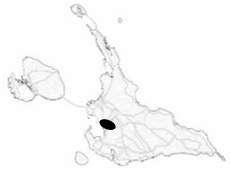
はじめに

宮古島市には、現在 46 の字（平良地区：15、城辺地区：10、下地地区：10、上野地区：４、伊良部地区：７）がある。宮古島市総合博物館では、平成 30 年度より字の調査を始めた。第１回目となるのが東仲宗根である。今回は東仲宗根について各分野で調査したことをまとめ報告する。

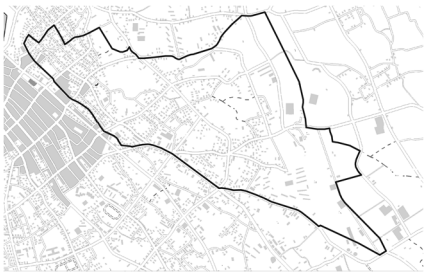
字の概況

宮古島の西北部に位置する東仲宗根地区は、最も古くから開けた地域のひとつであり、仲屋・旭・高阿良・東川根からなる。現在第１種住宅専用地域に指定され、保育園、幼稚園、市立東小学校、県立宮古工業高校の教育機関やショッピングセンター（サンエー）、陸上競技場や総合体育館などがある。

人口は 2017 年 12 月末日現在、6,761 名（男性 3,299 名、女性 3,462 名）で、世帯数は 3,018 戸となっており、宮古島市の中で下里地区に次いで２番目に人口の多い地域となっている（「統計みやこじま」）。



地図１　東仲宗根の位置



地図２
東仲宗根全体地図

１．東仲宗根の歴史（久貝、寺﨑、與那覇）

○歴史資料と遺跡調査にみる東仲宗根（久貝）

○歴史の道にみる東仲宗根　（久貝）

○近世・近代における東仲宗根（久貝）

○史跡、石碑、慰霊碑、遺跡、戦争遺跡（寺﨑）

○東仲宗根の偉人、関連人物（久貝）

○歴史資料と遺跡調査にみる東仲宗根

宮古諸島は、首里王府時代の支配下に入った 15 世紀末までに『御嶽由来記』『雍正旧記』『宮古島記事』『宮古島記事仕次』などの宮古島旧記類がある。これらは、島内につたわっている伝説や祭事、行事などを始め自然や人事についてまとめたものである。

その『御嶽由来記』[1]によれば、島始め（宮古島開基伝説）として古意角（くいつぬ）姑依玉（くいたま）の二神が、今の漲水御嶽の場所に天降りし、諸々の神々を産み、万物を造り島建てをして、人の世が初めて現れたとある。この創世神を祀った霊地が漲水御嶽で、島建ての二神は、子の宗達神（そだつがみ）には東の土地（東仲宗根）を与え、嘉玉神（よしたまがみ）には西の土地（西仲宗根）が与えられ両部落ができたといわれ、続いて下里、西里、荷川取と広がる。

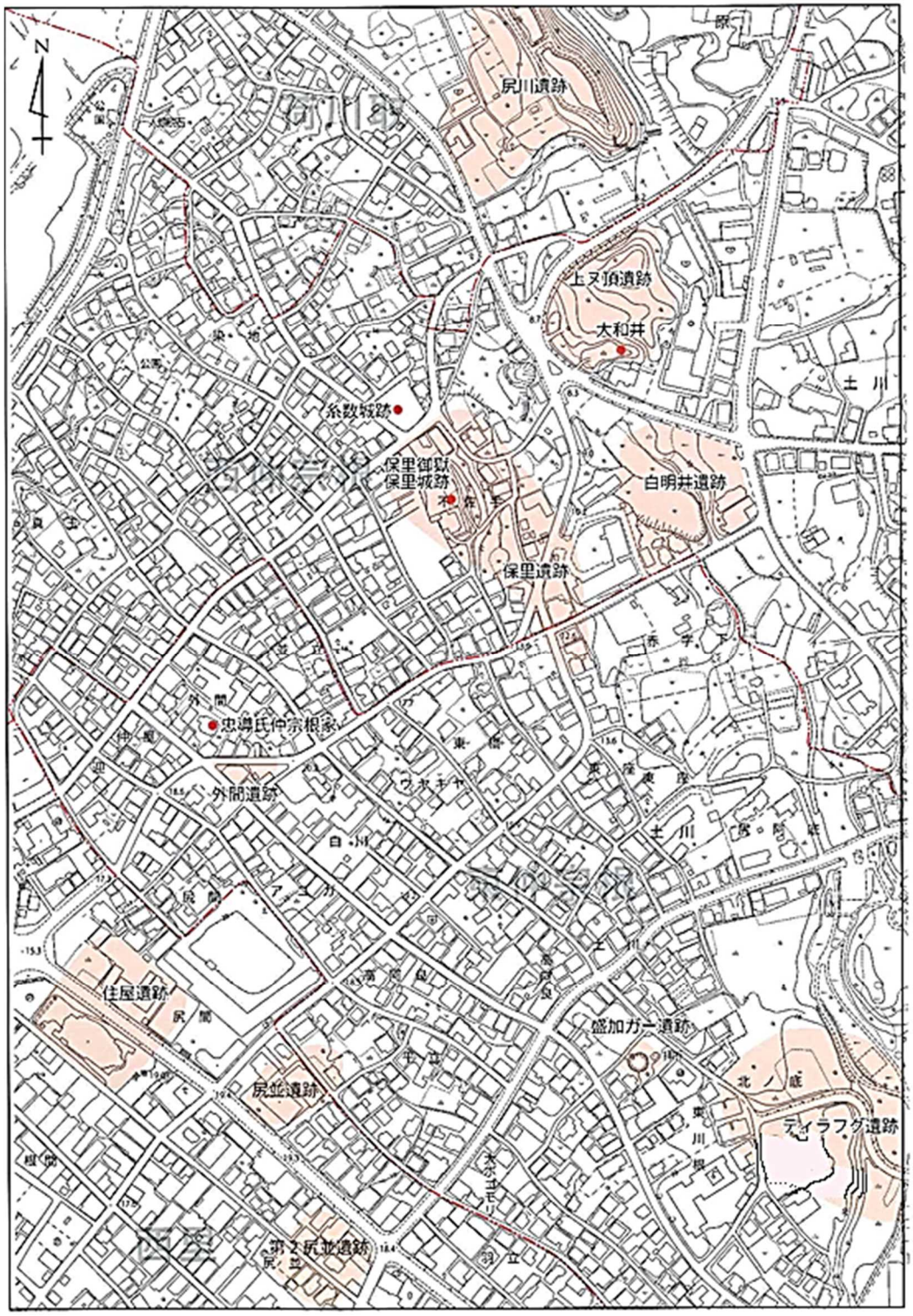
『宮古旧記』（宮古島記事仕次）によると、東仲宗根・西仲宗根は多くの天太・按司が住んでおり、ウリガーを中心に集落が形成されている。郷土史家の稲村賢敷は『宮古島庶民史』において、「彼等（与那覇原）は盛加川を中心として住み、その西は与那覇原と称し、ほぼ現在の東川根附近である。（中略）佐多大人の居城は盛加川の南西方に当り、与那覇原番所の趾と称している。別段要害という程のことはなく、平地の域である。この居城の南方を大籠というから、昔は大きな部落があったものと思われる。大籠の南は羽立である。羽立は南里の事で与那覇原屋敷を中心とした名称であるから、当時この附近まで与那覇原の部落があったものと考えられる」と記している。歴史資料を証明するように盛加川の近隣にはティラフグ遺跡[2]（図１）があり、掘立柱建物跡が２基と 13 世紀後半～14 世紀前半の白磁や野城式土器が出土しており、グスク時代の集落遺跡の一部として確認された。

その後、目黒盛豊見親が登場し佐多大人との戦いを稲村は、「漲水の浜辺まで退散するようになり、流石の目黒盛豊見親も遂に最後の決意をするまでに到った。この時、西仲宗根の主

1　『御嶽由来記』は 1705（康熙 44・宝永 2）年宮古から首里王府宛に最初に報告された旧記で、その内容は各御嶽の祭神や由来を記してある。

2　『宮古島市文化財発掘調査報告書第 17 集　ティラフグ遺跡―共同住宅建設工事に伴う発掘調査報告書―』2018（平成 30）年 12 月。

図１　字東仲宗根における与那覇原と目黒盛の勢力範囲と遺跡図



そらこいという者が援兵を率いてふらの崎方面より豊見親の救援に馳せ参じ、暫くするとそのり嶺に挙がった目黒盛の戦闘旗を望み見て、附近の農民軍が次第に集まって与那原軍の背後を襲うたので、戦況は逆転して遂に最後の勝利は目黒盛軍に挙がったのであった。この時、与那覇原軍の死傷者はその大半に及び、死屍は累々として道路に横たわり、東仲宗根の「あこうがーあぶや血ぱ端あぶ」等は、鮮血流れて物凄かったと言い伝えている。」と記している。「あこうがー」は北小学校裏門（北西側）の向かいにあった御嶽で、現在の位置は移動されているが、もとは旧宮古島市立図書館北分館の駐車場付近と考えられ、アブとは洞穴であるので、「アコウガー洞穴」という場所が特定できる。

また、「目黒盛豊見親の旧址根間の地は、現在宮古地方庁附近であり、その南は住みやと称し、その北には東小籠という部落があり、その北は高阿良と称した。また根間と外間の中間は中屋と称し、現はいから湯屋附近である。外間の北には並立があり、その北は尻立となっている。これらは皆根間を中心として称せられた名称であるから、目黒盛豊見親の時、既に部落立ができていて、豊見親の勢力下にあったものと思われる。」と記されている（図２）。また、「目黒盛豊見親の子孫の真角与那覇盤の子は、長男の房佐盛系統と次男の伊嘉利系統との二つがあり、根間伊嘉利系統は後に東原に移って根間氏（定姓）東原家と称した。いずれも宮古古来の由緒ある家柄として頭職以下の要職に就き、近世に至るまで家門繁昌して居る。」とあるので、現在でも、目黒盛の子孫に関係する御嶽が残されている。

東仲宗根にある外間御嶽は、『雍正旧記』[3]によれば、本来根間大按司、祢間津のかわら、目黒盛、真角与那盤、普佐盛らの５人を葬った墓所であったとされ、その墓所を普佐盛の弟である伊かりが、外間御嶽として仕立てたとされている。

平成 22（2010）年に、県道３・４・３号市場通り線拡幅工事に伴い「外間遺跡（外間御嶽）」[4]が報告された（図１）。それまでにも、昭和の初期に外間御嶽を斜めに切るように道路がつくられ、その御嶽の一部が破壊された。また、昭和 43 年頃には、外間御嶽を移設して北市場の建設が行われ、その姿を変えている。大正当時の御嶽の敷地内には、石積みが廻り、うっそうとした木々が生い茂り、市内でも有数の御嶽であったことが、報告書の聞き取り調査で確認されている。2018 年に聞き取りした際にも大きな御嶽であったことが確認できた。

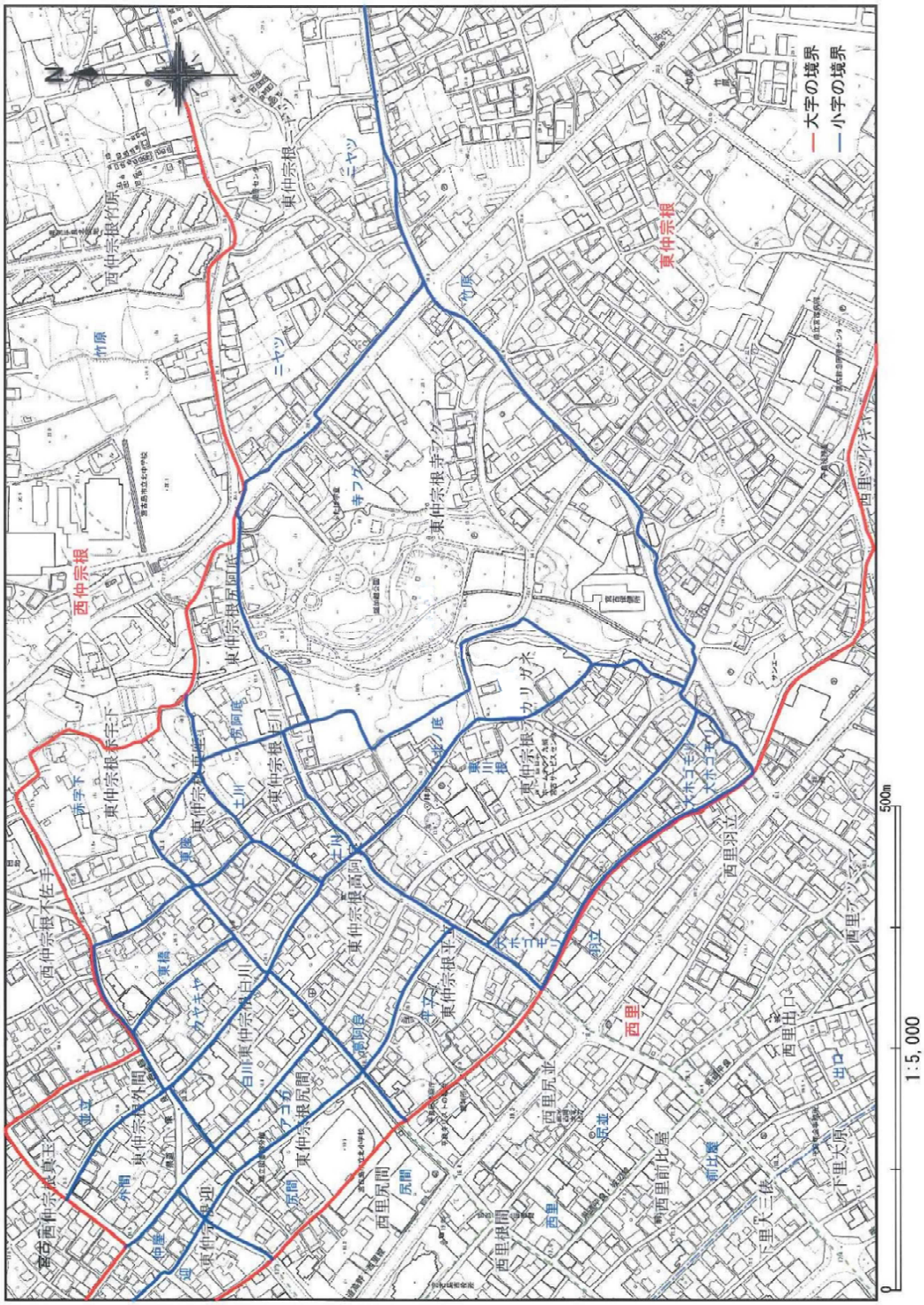
遺跡では、墓域と御嶽跡が確認された。調査の結果、墓域では 13～15 世紀の土壙墓３基を含め８体（男性２体、女性２体、幼児１体、不明１体）の人骨が検出された。土壙墓の形態

---

3 『雍正旧記』は雍正５（1727）年にまとめられた。

4 『宮古島市文化財調査報告書第３集　外間遺跡　―県道３・４・３号市場通り線拡幅工事に伴う発掘調査報告書－』2010（平成 22）　宮古島市教育委員会

図２　東仲宗根の大字と小字



としては、土を掘り込んで人骨を埋葬する一般的な土壙墓の他に、人骨を埋葬する際に、10cm程の石灰岩礫で人骨を覆うよう埋葬する土壙墓の二つのタイプが見られた。埋葬人骨の頭囲方向については、北西方向に優位性が見られ、また、仰向けの状態で足は後側へ曲げる１体と膝を立てる２体が埋葬されている。御嶽跡は、方形を意識して礫を敷いた石敷遺構と礫敷の一部にハマサンゴの切石を組み、地形という整地方法が確認されている。また明治期頃の道路跡も検出されている。

○歴史の道にみる東仲宗根

『御嶽由来記』は、行政の中心となった蔵元は弘治年間（1488～1506）に仲宗根豊見親によって平良に設けられたとし、頭職は、当初、平良大首里大屋子のみであったが、程なく下地大首里大屋子が設けられ、ついで万暦 39（1611、慶長 16）年には砂川大首里大屋子が任命されて３頭３間切となったとある。「三人の地頭はそれぞれ、各間切の指揮・命令を分掌し、村々の役人が書き上げた上納高、貯米量などを取りまとめて、蔵元に指出し、在番の検査を経て、翌年上国の折りに持登るよう申し渡されていた。しかし、多良間島は遠海のため間切から除かれ、頭三人の共同管理とされた」と『与世山親方宮古島規模帳』にある。

他方、間切内の村々は時代によって若干相違したが、正保４（1647）年の「宮古島絵図帳」や享保 12（1727）年の『雍正旧記』などによれば、ほぼ表１に整理することができる。

表１『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅷ―宮古諸島の道―』1991 沖縄県教育委員会 より

慶長１６年（１６１１）	正保４年（１６４７）	享保１２年（１７２７）	明治６年（１８７３）
いきやたら、いり中宗根	いきやたら、いり中宗根	荷川取、西仲宗根	荷川取、西仲宗根、東仲宗根
あかり中宗根、新（下）里	あかり中宗根、新（下）里	東仲宗根、下里	下里、〔西里〕、松原
松原、上地	松原、上地	松原、〔久貝〕	久貝、川満、洲鍵
川みつ、洲鍵	川みつ、洲鍵	川満、洲鍵	上地、与那覇、嘉手苅
与那覇、くれま	与那覇、くれま	上地、与那覇	宮国、新里、砂川
みや国、新里	みや国、新里	〔嘉手苅〕、宮国	友利、保良、平安名
おろか、友利	おろか、友利	新里、砂川	〔新城〕、野原、〔比嘉〕
中きや泊、きんす川	ひやくな、かりまた	友利、〔保良〕	長間、〔川根〕、大浦
ひやくな、根升間	嶋尻、大おかみ	〔平安名〕、〔野原〕	嶋尻、狩俣、大神
かりまた、嶋尻	いけま、国中	長間、〔大浦〕	池間、〔前里〕、来間
大おかみ、いけま	たらま島（含みつな島）	嶋尻、狩俣	伊良部、〔仲地〕、国仲
くがい、国中		大神、池間	佐和田、〔長浜〕、仲筋
にし		〔伊良部〕、〔佐和田〕	塩川、水納
たらま島（含みつな島）		来間、〔仲筋〕	
		〔塩川〕、水納	
２５ヵ村１島	２０ヵ村１島	３０ヵ村	３８ヵ村

注：正保４年の村は同村の「宮古島絵図帳」に記載された村名のうち「此村当時無之」を除いたもの。慶長１６年の分は同絵図帳に記載された全村。享保１２年の分は「雍正旧記」に記載された村々。明治６年の分は「琉球藩雑記」に記載された村々、〔〕は初出の村々である。

薩摩の侵攻や人頭税導入の衝撃の残る正保４年を底辺として、明治６年までに村が二倍近く増加したとみることができる。

『雍正旧記』によれば、新村の村建ては再興も含めて18 世紀前半に集中している（表２）。「この点は、沖積平野部の開発や人配などによって新村の建設や廃村の再興が行われた沖縄や八重山と同じである。琉球王国の村落編成の骨格がほぼこの時期に形成されたものとみなすことができる。しかし、このような新村は建設や開発、災害などによる村落移動は、村番所の位置の変更を伴い、蔵元と番所を結ぶ行政道路（宿道）の道筋を変えることになったとされる。

表２　同上

村　　名	村建の年次
川満村	康熙２５年（１６８６）
嘉手苅村	〃　５３年（１７１４）
保良村	〃　５５年（１７１６）
野原村	〃　５５年（１７１６）
大浦村	〃　５３年（１７１４）
長間村	雍正１３年（１７２５）

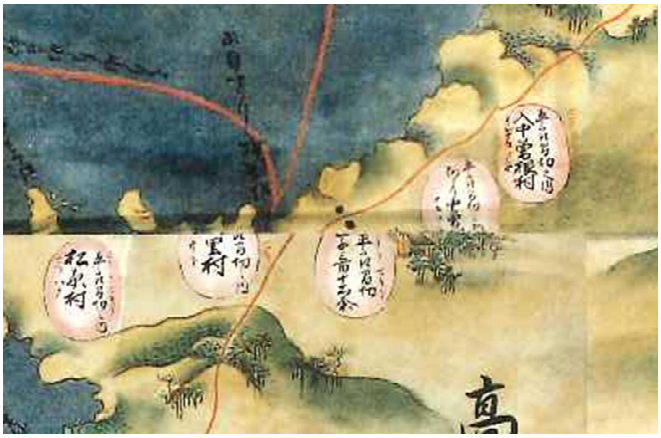
注：「雍正旧記」による。

以下、東仲宗根にどのような宿道があったのか、この地方の宿道と蔵元からの里程などについてみていきたい。

表１で確認してみると、慶長 16（1611）年において、東仲宗根はあかり中宗根とあり、正保４（1647）年においても、そのままあかり中宗根と読める。亨保 12（1727）年においては現在の東仲宗根の表記になっている。国立公文書館（東京都千代田区竹橋）所蔵の『正保国絵図』[5]のなかの宮古島の地図は、彩色を施されたきわめて正確な地図で、北の阿（あ）かり中曽根村、入中曽根村を経て、嶋尻村、狩俣村にいたる宿道が記載されている（図３）。

『雍正旧記』には、平良四ヶ村（下里、東仲宗根、西仲宗根、荷川取）に一里塚の記号が記載され、漲水港からは沖縄諸島方面と八重山諸島方面への航路が開かれていた。また、周辺の永良部（伊良部）島、下地島、多良間島、水納島、大神島、池間島および来間島へも小航路が設けられているのが確認できる（図４）。正保国絵図には、権現堂が描かれており、『琉球国由来記』巻十の「諸寺旧記」には、宮古島の龍峰山祥雲禅寺の社宮に大権現とある。正保４（1647）年の『正保国絵図』（図４）は、

図３　正保国絵図（平良間切り付近の拡大図）



[5] 『正保国絵図』　江戸幕府の命で、慶長・正保・元禄・天保の４回、全国規模で国ごとの絵図等が作成されました。別名、「宮古八重山両島絵図帳」ともいわれている。

図４　正保国絵図

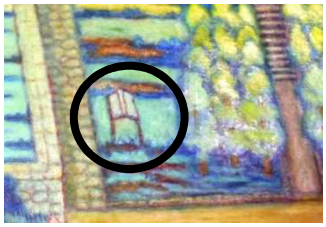
「嶋長七里拾弐町ハおろか間切百名崎より北かりまた間切ひゃん名崎迄　附道法八里拾町」と記されている。平等（良）間切については、平良間切、いり（入）中曾根、阿かり中曾根、新（下）里、松原の５ヵ村を間切の範囲と石高が記されている。阿かり中宗根村は、高七百四拾四石弐斗六升五合五勺九才となるが、平良間切が、三千三百十石余となるのでおおよその五分の一の負担となっている（地図上では平良間切の石高が記載されている）。

宮古島全体では、「宮古嶋　嶋廻り十一里　高壱萬貳千四百五拾八石七斗九升弐合」となっているので、約四分の一の石高を平良間切が納めていることになる。

『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅷ―宮古諸島の道―』では、平良の中心をなす蔵元の傍に里程の基標「距離測定基標」があったという。図４の平良間切を拡大したのが図３で、距離測定基標（一里塚）は宿道を挟んで黒丸２点（●）●で記されており、その「距離測定基標」は、故宮原昌茂氏の記憶を頼りに描かれた蔵元図（図５）で確認することができる。建立位置は、石畳道に並行して、石畳の入り口付近である（図６）。

図５　故宮原昌茂氏の『蔵元図』

図６『距離測定基標』



報告書によると宮原氏は、「当基標は人目につく堂々とした建造物であったのに文献がないのは不思議である。」また、「外観は屋根型（縦１ｍ×横２ｍ×高さ１ｍ位）であった。材料は漆喰を固めた様なもので、岩石の様な色合いでした。」とある。他方、同報告書における仲宗根將二氏の聞き取りでは、「80歳前後の人びとの記憶にある道路標識の基点は、

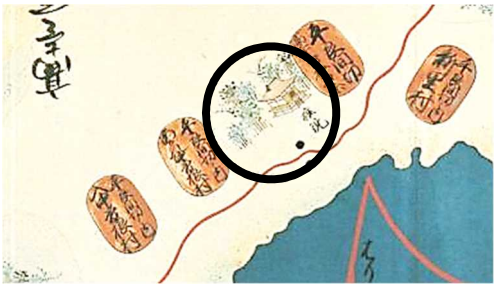
蔵元傍のそれではなく、宮古警察署前の角にあったという。この位置は、在番筆者の居住した西仮屋の向かいでもある。また、西仮屋は 1911（明治四十四）年から平良村役場の置かれた場所である。1923（大正二）年に始まった、三村組合道路との関連で、竣工後、蔵元跡近くの基標とは別に設置したのであろうか。」と推察している。

一方、元禄国絵図[6]（図 7）は、元禄 9（1696）年にその作成が命じられ、同 15（1702）年までにほぼ全国の分が完成したといわれている。１里を６寸とする縮尺（約 21,600 分の 1）で、山、川、道路等が描かれ、街道を挟む形で描かれている黒丸は一里塚の表示で、郡別に色分けされた楕円形の枠内には間切名と村名とが記されている。

図７　元禄国絵図

元禄国絵図は、色彩色豊かな権現堂の建物や植物が一緒に描かれており、ここに「権現」の文字が初めて記される。また、石高の記載の最後に書かれた氏名から薩摩藩（松平薩摩守）が絵図の作成にあったことが判る。平良間切は、いきやたら（荷川取）、いり（入）中曽根村、あ（阿）かり中曽根村、新（下）里村が確認できる。

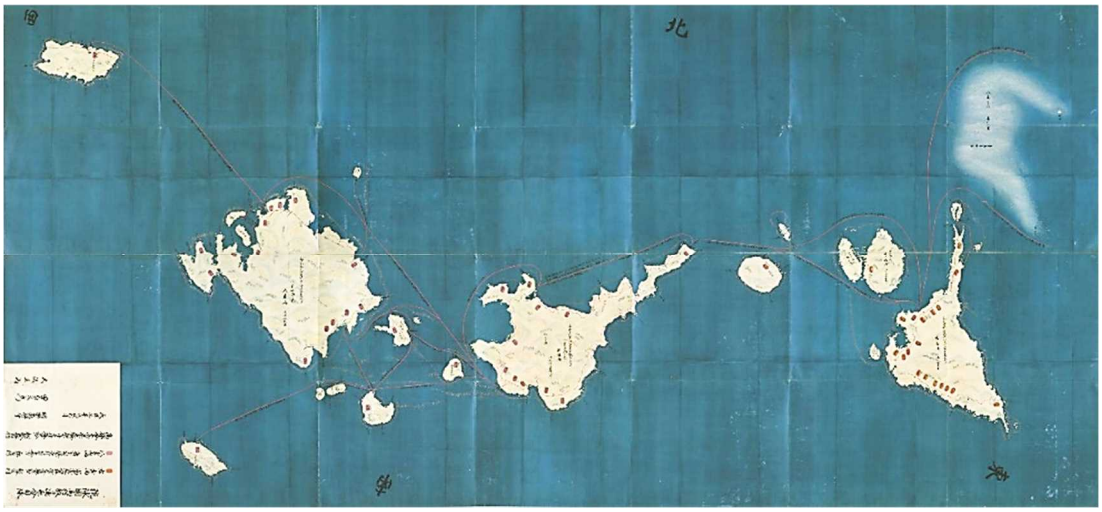
図８　元禄国絵図（拡大図）



[6] 元禄国絵図　琉球国八重山島（元禄）【国立公文書館デジタルアーカイブより引用】

国立公文書館には、元禄図の原本 8 鋪、模写本 8 鋪が保存されている。天保国絵図全国分 83 鋪（重複を含めると 119 枚）及び松前島から琉球まで国ごとに各村の石高を記した「天保郷帳」85 冊とともに昭和 58 年（1983）国の重要文化財に指定された。原図サイズ：東西 261cm × 南北 589cm。国立公文書館所蔵

図９　天保国絵図

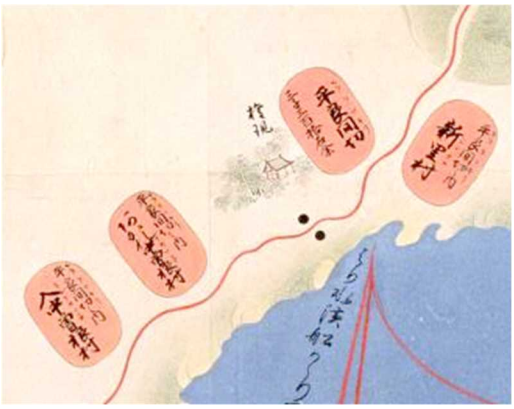


天保国絵図[7]は、天保６年（1835)その作成が命じられ、同９年(1838 年)に完成した。縮率・描法等は元禄国絵図と同様である（図９)。

宮古島の北方には、旧暦３月３日に巨大な姿を現すとの伝説を持つ、東西一里半、南北五里の大型の「さんご礁大陸」、八重干瀬が描かれている（図９)。

平良間切の宿道には距離測定基標が、黒丸２点（●）●)で記されており、「権現」の文字と建物、樹木が描かれている。平良間切は、入中曽根村、あかれ中曽根村、新里村、松原の五ヵ村を間切名と村名が記されている（図 10)。

図 10 天保国絵図（拡大）



---

[7] 天保国絵図　琉球国（八重山島）【国立公文書館デジタルアーカイブより引用】

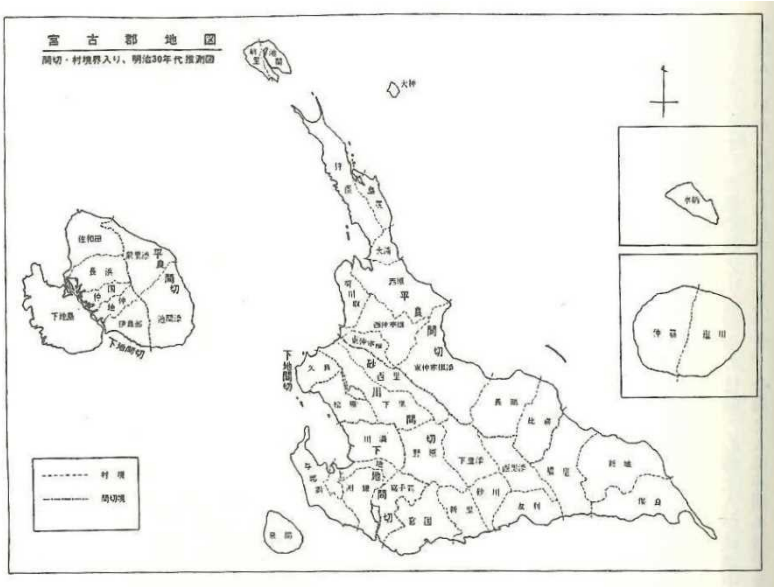
各絵図の一隅には、郡ごとの色分け・石高(こくだか)・村数を列挙した凡例が記され、最後に国絵図の作成に関係した勘定奉行・勘定吟味役・目付の氏名が加えられている。一部の地図には罫線が引かれている。陸地測量部が新たな地図作成のために、国絵図を模写したこともあり、明治維新後も実務に活用されている。国立公文書館には、天保国絵図全国分 83 鋪（重複を含めると 119 枚)、縮小図等 12 鋪が保存されている。元禄国絵図及び松前島から琉球まで国ごとに各村の石高を記した「天保郷帳」85 冊等とともに昭和 58 年（1983)国の重要文化財に指定された。天保国絵図は、良質の料紙に描かれた上、何重にも裏打ちがされているため、かなり厚いものになっている。原図サイズ：東西 261cm×南北 566cm。

○近世・近代における東仲宗根

旧藩時代は、現在の大字は村と称していた。始めウプミヤーク（大宮古）間切一つであったたが、のちに順次平良、下地、砂川の三間切に分れ、村々はその何かに属していた。平良間切東仲宗根村、下地間切久貝村、砂川間切下里村といったふうに間切とは間（ま）を切る、区画の意と解される。

行政区画としての東仲根は、1879（明治 12）年は三間切一島・38 ヵ村（平良間切・砂川間切・下地間切・多良間島）で、平良間切のなかの１村（東仲宗根村）となる。1908（明治 41）年４月１日には四ヵ村（平良村・城辺村・下地村・伊良部村）・43 ヵ字となり、平良村のなかの一字（字東仲宗根）となる（図９）。その後、1924（大正 13）年２月１日に平良町となり、1947（昭和 22）年には平良市となった。2005（平成 17）年に宮古島市となり、一字の行政区として東仲宗根は存続している。

図９　間切・村境界入り・明治 30 年代推測図



参考文献

『宮古島庶民史』1972　稲村賢敷　三一書房
『宮古島旧記並史歌集解』1977　稲村賢敷　至言社
『平良市史　第１巻　通史編Ⅰ　先史～近代』1979　平良市史編さん委員会　平良市役所
『平良市史　第３巻　資料編１　前近代』1981　平良市史編さん委員会　平良市役所
『沖縄県文化財調査報告 54 集　―詳細分布調査報告書―宮古の遺跡』1983　沖縄県教育委員会
『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅷ―宮古諸島の道―』1991 沖縄県教育委員会
『琉球国絵図史料集第１集―正保国絵図及び関連史料―』1992 沖縄県教育委員会
『宮古風土記〈上巻〉〈下巻〉』1997　仲宗根將二　ひるぎ社
『宮古島市文化財要覧　宮古島市の文化財』2011 宮古島市教育委員会

○史跡、石碑・慰霊碑、遺跡、戦争遺跡

（１）史跡

① 東仲宗根村番所跡

東仲宗根にユーラジ御嶽という御嶽があり、その一帯にかつて東仲宗根村番所があった。近世に入ると村番所が整備され、敷地内には役人の詰所や苧績屋（ぶんみゃー）などが設けられた。村番所を介して村の行政が行われた。（『宮古島市史』通史編より）

② 忠導氏仲宗根家の庭園

かつて、宮古の主長を勤めた仲宗根豊見親玄雅を元祖とする仲宗根家の庭園。地泉鑑賞式庭園で、琉球庭園の典型的な回遊路の手法をなしている。（『綾道-平良北コース-』より）

③ 仲屋金盛ミャーカ

上記の仲宗根豊見親玄雅の長男である仲屋金盛を葬った墳墓である。16 世紀初頭、宮古島の頭職を勤めていたが、家臣を信じて城辺の金志川豊見親を討ち、中山からとがめを受け自害した。忠導氏本宗を継がなかった。（『綾道』『沖縄大百科事典（下）』より）

④ 盛加ガー（洞井）

盛加ガーは、平良近郊でもっとも大きい降り井（洞井）である。かつて水道のなかった頃、人々は生活用水を井戸や天水、降り井から得ていた。盛加ガーの石段には、当時の女性や子どもたちが踏みしめた跡が残っている。（『綾道-平良北コース-』より）

（２）石碑・慰霊碑

①　「優勝記念」碑

沖縄銀行の寄付により、宮古島市総合体育館に建立。1987（昭和 62）年 10 月 26 日から 29 日の間第 42 回国民体育大会（海邦国体）の成年男子・女子のバレーボール競技が当時の平良市と上野村で開催され、県代表の男子沖縄銀行チームが初優勝した。

②　「翔けスポーツアイランド宮古島」碑

日本航空、南西航空の寄贈で、宮古島市総合体育館に建立された。台座は宮古諸島を表しており、その周囲には歴代のトライアスロン優勝者の写真・成績が刻まれている。

③　「豊旗の塔」

1967（昭和 42）年 2 月に宮古市町村会により建立された。

宮古島防衛を任された第 28 師団、宮古島海軍警備隊の 2,914 柱が祀られている。（「豊旗の塔」碑文より）

④　「輜重兵第二十八聯隊戦没者慰霊之碑」、「愛馬之碑」

1977（昭和 52）年 8 月旧輜重兵第二十八聯隊戦友会により建立された。19 柱が祀られている。

輜重兵は、武器や弾薬などの軍需品の輸送を担当していた。

⑤「英霊之碑」山砲兵第二十八聯隊

1979（昭和 54）年 6 月、旧山砲兵第二十八聯隊第五中隊により建立された。158 柱が祀られている。

⑥「光寿」旧陸軍歩兵第三十聯隊慰霊碑

1983（昭和 58）年 11 月、旧陸軍歩兵第三十聯隊戦友会により建立された。408 柱が祀られている。

⑦「通魂碑」第二十八師団通信隊

1988（昭和 63）年 10 月、旧第二十八師団通信隊 204 会により建立された。31 柱が祀られている。

⑧「騎兵第二十八聯隊慰霊塔」、「愛馬供養塔」

1988（昭和 63）年 12 月、旧騎兵第二十八聯隊お九二会により建立された。45 柱が祀られている。

⑨「神風特別攻撃隊第三龍虎隊」慰霊碑

1994（平成 6）年 12 月に建立された。

⑩「噫噫忠烈丈夫之墓」特設水上勤務第一〇一中隊

特設水上勤務第 101 中隊によって建立された（建立年月日は不明）。

（３）遺跡

①外間遺跡

外間遺跡は、1727 年の記録である『雍正旧記』の中に、仲宗根豊見親の祖先 5 代を葬った墓所であり、そこを御嶽として仕立てたと記されている。調査の結果、13～15 世紀の土壙墓 3 基を含め、8 体の人骨が検出された。その他、県内では類例のない複数の溝を並列した列状溝群も検出された。

中世～近世の遺構面では、外間御嶽跡と考えられる石敷遺構や石組遺構が検出された。また、当時の廃棄場と考えられる大型の土坑が 4 基確認され、一括性の高い資料を得ることができた。

②盛加ガー遺跡

NTT の西側より約 30ｍで東川根自治会館（元東川根保育所）の隣である。

盛加ガーは、現在、宮古島市の指定文化財となっている。ウリガーの形態をとり、井泉近くには石積みが残っている。ウリガーへの階段は、自然の石灰岩を切って段にしたものである。ガーの周辺台地は、現在住宅が密集しているが、旧屋敷跡の畑地周辺にどき、陶磁器が散布している。破壊された状態に近く、一部の屋敷跡の周辺部をのぞいては明確な包含層は判然としない。盛加ガーは現在でも信仰の対象地となっている。盛加ガーは、平良近郊で最大規模のウリガーとされており石段は 103 段設けられた。1975（昭和 50）年 12 月 11 日に市指定の文化財となっている。

③ティラフグ遺跡

NTT の後方にあり、通称ティラフグと呼ばれる谷間を中心としてその上方台地周辺に形成された遺跡である。台地部分には、拝所があり周辺部において多量の遺物が散布している。周辺畑地においても小破片ながら土器が採集される。

平坦な丘陵地が東南側にのびる。福木林が部分的に残っていることから元屋敷があ

ったと思われる。宅地化の進行が著しい。

④東仲宗根遺物散布地

宮古島市総合グラウンドの後方に標高 50～60mラインの石灰岩丘陵地が形成されている。南北に細長く張り出した丘陵地形となっている。東側は直崖で山林に覆われているため崖下の調査ができない状況である。植林の際の造成中に新たに確認された遺跡である。

南北約 500m×東西約 40mの範囲にわたって土器片、須恵器片、輸入陶磁器片などが採集される。青磁器は古いタイプで、薄手の大振の碗に類するものが 1 点復元可能なものが採集されている。

（4）戦争遺跡

①盛加越の海軍通信隊壕

築造年月日：1945（昭和 20）年頃

築造者：旧日本海軍通信隊

戦時中の使用状況：戦時中に通信隊の壕として利用

現在の東仲宗根小字テラフグにある盛加越公園内に、コンクリート造りの煙突が 3 本立っている。地表面では 1.5mの高さを有し、幅 0.9mの孔が内部へと繋がっている。その場所には、かつて海軍通信隊の地下壕があり、先の煙突は空気孔として利用されていた。内部は東西方向に造られており、全面コンクリート造りで、4 畳半～6 畳ほどの部屋を 3 つ繋げた構造となっていた。また出入り口は左右に 2 カ所設けられていた。現在は、公園整備時に唯一内部へ出入りすることができた空気孔が塞がれて、僅かに埋没しかかった開口部から中を窺うにすぎない。

この周辺は、公園整備前、古墓が多数分布する谷地形を呈していた。1995（平成 7）年の 1 月に盛加越公園整備に伴う周辺の試掘調査が平良市教育委員会によって実施され、艦砲弾の破片と思われる遺物が確認されている。

当初、この壕は盛加越公園設置計画では取り壊す予定であったが、平良市文化財保護審議委員会による保存要請により、内部を閉鎖する形で公園内に現地保存とした。

当時、この壕においてはモールス信号の受信や飛行機の離発着に必要な気象状況の観測等が行われていた。なお、この壕の東側にある市立北中学校や南東側の旧宮古病院周辺には、相当数の兵舎が設置されていた。

②二重越の地下壕群

築造年月日：1944（昭和 19）年頃
築造者：海軍沿岸警備隊、北台湾航空隊
戦時中の使用状況：陣地壕として利用

東仲宗根小字二重越にある崖周辺に点在している。その範囲には、農業センターから NHK テレビ電波塔あたりまで点在しており、明らかに人工的に掘られた壕は 10 箇所確認することができた。奥行 5m程の小規模なものもあれば、最も規模の大きいもので幅 3m、高さ 2.5m、5 つの壕口を結ぶものである。

最大規模の壕は平良市民球場の裏手に所在している。東西軸の壕が 5 つ平行して掘り、その間に 1、2 本の連結道を設置している。入口付近には小部屋が見られる。一部崩落している部分も見られるが、全体的に残存状況は良好である。

また、この北側にも 2 つの壕口を結ぶ同規模の壕が見られるが、平面形がコの字型となる壕が見られる。奥には小部屋を一つ見ることができる。

この崖面一帯には、古墓が造られており、それを壕として利用した痕跡も見ることができる。墓室の壁面を加工して小部屋を設けていたり、内部に薬莢や薬瓶、ビール瓶、缶詰が散乱している壕も多く見られた。これらの古墓は、平良町民の避難壕として利用されており、現在はほとんどが空墓となっている。

二重越の崖面には古墓を合わせて 35 箇所、壕を確認することができた。これらは主に①奥行きのない小規模な壕、②複数の壕口を結ぶ大規模な壕、③古墓を利用した壕と 3 種類に大別することができる。

かつてこの周辺には、海軍沿岸警備隊・北台湾海軍航空隊が陣地を敷いており、それらの陣地壕と考えられる。戦没将兵を祀る豊旗の塔から平良市民球場周辺の崖下には北台湾海軍航空隊が、その北側には海軍沿岸警備隊が陣地を敷いており、大規模な壕は前者の陣地壕に比定することができる。聞き取り調査では、二重越崖上にある浄水場近くに砲台が設置されていたとある。ちなみに、北台湾海軍航空隊の宮古島における活動は航空電波管制であったとされる。

【参考文献】

1983（昭和 58）年　『沖縄大百科事典』下巻　沖縄大百科事典刊行事務局編集
沖縄タイムス社発行

2004（平成 16）年　沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 30 集
『沖縄県戦争遺跡群細分布調査（Ⅴ）―宮古諸島編―』
沖縄県立埋蔵文化財センター編集・発行
2012（平成 24）年　『宮古島市史』第 1 巻（通史編）　宮古島市史編さん委員会編集
宮古島市教育委員会発行
2014（平成 26）年　宮古島市 neo 歴史文化ロード「綾道」平良北コース
宮古島市教育委員会編集・発行

○東仲宗根の偉人、関連人物

目黒盛豊見親　生没年不詳　　14 世紀中頃の人

争乱統一の豪族。目黒盛については、『宮古島記事仕次』において数多く語られているが詳細な年代は不明である。按司・殿と称する群雄が各地に割拠していた宮古島の争乱時代、仲宗根の根間に根間大按司があり、その嫡男は根間の大氏、長女孟仁屋知、二男角かあら天太大氏と称した。この二男かあら天太大氏と西銘村の嘉幡親（炭焼き太良と言う）の長女思目娥との間に生まれたのが目黒盛である。目の上に北斗を象った痣があったためその名を得、父母が三歳のとき死没したので叔父の根間大氏に育てられた。容貌美しい子で七歳まで足が立たなかったが、歩行の自由を得たときから、武芸の達人の聞こえが高かった。

目黒盛が十五の時、浦島（今の下地町川満の東方）に浦天太がおり、その妻の孟仁屋知（伯母）を見舞うために浦島に行く途中、野鴨を２、３羽射取って土産とした。その武芸を、浦天太は妬み、不具にしようと試みたが失敗に終わった。伯母は、「弓矢を捨てて農に励み身をたてよ」と言い、さらに「親ゆづりの畠「イナピケモリ」は良い土地で、当分糸数大按司にあづけてあるから申し受けよ」と諭された。糸数大按司のいる糸数城を尋ね、案内を請うたが相手にされず、弓矢を借りて十四の組的を射通した。後日、糸数大按司に改めて来るように言われたので、来てみれば酒肴のもてなしをうけたが、城壁には猪の網で囲み、城門を閉ざし、武芸にすぐれた二百人ほどの兵が大按司の下知を待っている状態であったので、城より逃れ出でた。糸数大按司は使いをたて「イナピケモリ」は七兄弟にあずけてあるから申し受けるように言い寄こしたので、目黒盛は七兄弟に会い、大按司の言葉を伝えて申し受けようとしたが「イナピケモリ」で戦って所有を決めようということになった。

目黒盛が十六・十七の時に七兄弟と二度戦い、一度目に七兄弟の膝頭を射抜き、二度目に大雁股の矢七つを放って七兄弟の両眼を射貫いた。七兄弟は其の夜に亡くなったので、目黒盛が勝利した。その七兄弟との戦いの帰途、白明川（スサカガー・現在の八千代バスの北西）

のほとりに住む、白川根志瑠殿（スサカニシルトノ）という長者の一人娘を娶って、争乱で衰微した根間家を再興し、根間に本城（現在の第二庁舎付近一帯）外間に外城（外間御嶽・仲屋金盛ミャーカ・現在の仲宗根スーパー付近）を築き、仁をもってのぞみ、争乱で離散した村人を擁護し、農耕をすすめ、諸所に御嶽を建立して安住の途をひらいたとされている。

1365 年頃、東方に「与那覇原むら」という一間切があり、佐多大人が主首で兵十行（一行は百人）を擁していた。佐多大人は目黒盛を尋ね、「今後は悔い改めて貴殿と和睦し太平を楽しもう」と語ったので、神酒を進め厚くもてなして帰したが、農繁期の忙しい時期をねらって一千余りの兵をひきつれ、突如として根間・外間の城を急襲した。目黒盛が漲水の浜まで追い落され、自害しようというところで、行方の知らなかった 2 匹の犬と農耕中の兵たちが陣をつくって馳せ参じ、北宗根の楚良古意が兵を率いて参加し、四方から押し包んで与那覇原軍を攻めたてたので敵はほとんど討ち果たされた。

与那覇原軍の滅亡によって島内の兵乱はおさまり、目黒盛の統一の業は成功した。庶民は仁慈の主、生命擁護の主と讃え、島の主長と仰ぎ、「目黒盛豊見親」と尊んだ。これが、「豊見親」称号の初めであるといわれる。豊見親は、地方の豪族を厚く遇し、令を発して御嶽を修復し、戦没した諸将を祭り、神祇崇敬の心を養い、条政一致の中央集権制を確立した。統制上の機関を、「イブサビ（軍事・政治統制）」「カムイビ（神位部・神事を取扱う。）は三つに分かれ、「カカリ部・神がかりして神託を告げる役目」「アヤゴ部・神の徳をたたえてこれをアヤゴにうたう」「ブトリ部・アヤゴにあわせて踊る」がある。」「トリアスビ（上納物（五穀の初物を捧げる）を取り合わす役目）」「トウツキビ（届付部でいろいろの命令を達し回る役目）」と四つつくった。条政一致の制度は成功し、村民は太平を謳歌した。豊見親は天寿を完うしたとされ、その晩年は神通力を生じ、奇蹟があったとされている。

作多おほひと　　生没年不詳　　14 世紀頃の人

「平良より東に」あった与那覇ばらという地方のぬし（主長）。佐多大人とも書かれる。1748 年の旧記『宮古島記事仕次』にこの人の名を見る。これによれば、「むかし、人々は兵を好んで戦火が絶えず、いくさに敗けた村を焼きはらい村人をばみな殺しにし、その田畑を奪い取るという争乱の時代があった。その頃「平良より東に」与那覇ばらという間切（地方）があり、兵千人をもっていて、各地の村々を攻め落す。「西の百郡、東の百郡」といわれるほど多かった村々はその多くが与那覇ばら軍勢によって亡ぼされる。この時代の争乱を人々は与那覇ばら軍（いうさ）と言い伝えている。作多おほひとはその与那覇ばらのぬしである。はかりごとをめぐらし、あざむいて高腰の按司や中きや泊の内立の按司を亡ぼした話、目黒盛との最後の決戦において敗走する。その際、兵力の多くを失ない、残兵は根拠地にたどりつく

が、「或夜大勢の攻入るやうに夥しく物音して一夜の内に悪党共暴死したりと云々」と伝えている。」

稲村賢敷の『宮古史傳』では、「与那覇ばらの勢力を与那覇原軍とよび、作多を佐多大人と書いている。それによれば、与那覇原軍は平良の街の東部、東川根付近である。」としている。その後、『宮古島庶民史』において、その居城を盛加川の南西方にある「与那覇原番所跡」と伝える一地点としているが、その後、平良市東方にある「ティラフグ御嶽」附近であるとしている。佐多大人の最後については、東川根の本拠地で殺された説を挙げているが、その他に、戦傷を負って下地の与那覇まで落ちていき、そこで死んだという言い伝えのあることを述べ、与那覇に佐多御嶽のあることを紹介し、「此処こそ当時の英雄佐多大人の英霊の眠る所であろう」としている。与那覇原の滅亡の年代については、1370 年代としている。

富盛　寛卓　とみもり　かんたく（1871 年～1924 年）教育者・宮古研究家

富盛家は仲宗根豊見親の三男知利真良豊見親を祖とする宮金氏の支流である。宮金氏は白川・忠導氏に次ぐ旧家であり、元祖知利真良豊見親以来、頭 13 人を出している。

富盛寛卓は、当時県内唯一の中等学校である県立沖縄中学校の卒業第一号で、沖縄学の祖・伊波普猷の一期先輩である。慶世村恒仁に先立って『郷土史』を出している。

仲宗根　玄愷　なかそね　げんがい（1883 年～1967 年）実業家

仲宗根家は仲宗根豊見親を祖とする忠導氏正統の直系である。玄愷は旧藩最後の洲鎌与人となった 15 世玄教と明勲氏の後裔である母マツの次男として、平良間切東仲宗根村 1 番地で生まれた。仲宗根玄愷は、沖縄中学を卒業して、宮古郡初の奨学生として早稲田大学を卒業、保険業界で活躍するかたわら、在京県人会、同宮古郷友会の役員として、郷土の発展にも力を尽くした。宮古出身として本土で活躍した数少ない実業家の一人である。

下地　玄信　しもじ　げんしん（1894 年～1984 年）公認会計士

県立一中から東亜同文書院をともに首席で卒業、大阪社交界で活躍する傍ら、高級軍人とまじわり、「満州国」建国や大政翼賛会に関与して戦争遂行に協力、戦後占領軍から公職追放された。解除後は公認会計士として再び国内外で活躍、また沖縄県の人材育成のために多くの小、中、高校に図書や奨学金を送りつづけた。平良市名誉市民、熱帯植物園に銅像建立、『育英の父　下地玄信』（亀川正東著）刊行でその功に応えている。

稲村　賢敷　いなむら　けんぷ（1894 年～1978 年）　教育者・歴史家

上運天家は首里・夏姓の後裔である。近世末期首里王府派遣の在番筆者上運天筑登之親雲上・夏姓賢献が宮古在勤中、宮古女性との間にもうけた一男が夏文氏二世賢英で、賢英・マツ夫妻の長男として生まれた。

宮古出身者としては県内の中等学校で初めて校長になった教育者であり、歴史家である。東京高等師範学校を出て、県下各中等学校で教鞭をとり、戦後は歴史家として宮古研究に没頭、『宮古島庶民史』『琉球諸島における倭寇史跡の研究』(1957 年)『宮古島旧記並史歌集解』(1962 年)『沖縄の古代部落マキョの研究』(1968 年) など多くの著書、論文を著わしている。71 年沖縄タイムス文化賞、75 年沖縄県文化功労賞、77 年平良市文化功労賞を受賞している。83 年『平良市史』全５巻出版記念感謝状をおくられている。上運天賢敷は、1923 年に「稲村」に改姓している。

國原　賢徳　くにはら　けんとく（1897 年～1978 年）　弁護士

上運天家は首里・夏姓の後裔である。近世末期首里王府派遣の在番筆者上運天筑登之親雲上・夏姓賢献が宮古在勤中、宮古女性との間にもうけた一男が夏文氏二世賢英で、賢英・マツ夫妻の二男として生まれた。長男は長じて歴史家として知られる稲村賢敷である。

独学で小学校教員免許をとり、さらに働きながら中央大学に学んで東京法曹界で活躍した弁護士である。在京宮古郷友会長として郷友のためにも尽力した。昭和初期の衆院選では宮古で初めて乗用車を導入したことで知られている。

川平　朝建　かびら　ちょうけん（1891 年～1956 年）　新聞記者・民謡研究家

朝建の祖父朝章は旧藩末期の同治 12～24（明治６～８）年まで宮古検見役相附として、首里王府から派遣された役人である。明治６年７月宮国沖におけるドイツ商船遭難救助にあたり、1876（明治９）年２月には同感謝記念碑建立にも立ち会っている。

大正初期宮古研究の草分けで知られる慶世村恒任と前後して新聞記者となり、宮古の言論界をリードするかたわら宮古民謡とその研究を、広く県内外に紹介している。そのどちらも宮古にとって草分け的存在といえる。

民謡の分野では、1944（昭和 19）年９月台北で刊行された『南島』第３集に収録された「宮古民謡について」がよく知られている。作曲家の金井喜久子は朝建の末妹で、その著『愛のトゥバルマー』は川平家三代の興亡を詳細に描いている。

金井　喜久子　かない　きくこ（旧姓：川平）（1906 年～1986 年）　作曲家

川平家は旧藩末期首里王府派遣の川平里之子親雲上朝章に始まる。朝章は宮古で娶った妻マツと宮古に永住し、一人娘ウミトに養子朝恵が迎えられた。長男が新聞記者、民謡研究家として活躍した朝建で、喜久子は四女となる。

平良女子尋常高等小学校（平女高）を卒業、1919（大正８）年４月、宮古出身初の県立一高女に入学し、数ヶ月後、胸の病に倒れ休学し、三年間、宮古島で闘病し、22 年復学、26 年３月に無事卒業した。その後、東京、上野の音楽学校を受験し、失敗したが、「音楽家になる」という決意のもとに、私立の中野音楽学校声楽科を受験し、合格した。1930（昭和５）年３月で卒業し、学生時代に東京商大（現一橋大）オーケストラでトロンボーンを吹いていた金井儼四郎氏と交際し、卒業を待って結婚した。

結婚後、夫の強いすすめで作曲の勉強を始め、上野の東京音楽学校作曲専科を受験、合格し、下総皖一教授の指導をうけ、卒業後、本格的に作曲家へのスタートを切る。

処女作は、沖縄メロディを取り入れた「月夜」「銀杏」で、下総教授にも評価され作曲家としての自信を深めていき、1941 年 12 月、初の交響曲「沖縄舞踊組曲」は好評により、翌年に日比谷公会堂で初の作品発表会を開いた。大雨の中、自らタクトを振るというハプニングのなか、あふれる聴衆は通路をうめつくすほどだったといわれている。

1944 年１月、戦火が激しくなり山梨県に疎開したが作曲活動を続けて、五線譜をあやしく捉えられ、非国民呼ばわりされ、スパイ容疑で捕まえられる。敗戦後の 1947 年 11 月には２回目の発表会が日比谷公会堂で開かれ、オーケストラでは「沖縄ラプソディ第１番」を発表した。1955 年 11 月、『琉球の民謡』で毎日出版文化賞、1956 年４月 MGM 映画、「八月十五夜の茶屋」の作曲で音楽賞、1971 年 12 月「沖縄わらべ唄」のなかの“じんじん”でレコード大賞童謡賞受賞と、沖縄メロディー中心の多彩な作曲活動は高い評価をうけている。

著書に『愛のトゥバルマー』（1984 年４月）がある。

参考文献

『平良市史　第８巻　資料編６（考古・人物・補遺）』1988　平良市史編さん委員会　平良市役所
『近代宮古の人と石碑　私家版』1994　仲宗根將二

２．地域を歩く（寺﨑）

はじめに

今回、東仲宗根について調査をするにあたって、まずは地域にどんな方々がくらし、どういう場所があるのかを知るために、実際に歩いて調査をした。ここでは、東仲宗根の行政区・自治会・御嶽についてまとめることにする。

（1）東仲宗根を形成する 4 つの行政区

東仲宗根には、概要にもあるように仲屋（なかや）・旭（あさひ）・高阿良（たかあら）・東川根（アガイガーネ）の 4 つの行政区がある。

仲屋には、迎（ンカイ）・仲屋・尻間（シシマ）（一部）・アコガ（一部）・外間（プカマ）・並立（ナンダティ）などの小字がある。仲宗根豊見親を始祖とする忠導氏仲宗根家の庭園や仲宗根豊見親の長男仲屋金盛のミャーカなどの史跡や外間御嶽やユーラジ御嶽といった多くの御嶽が点在している。また、弁当屋や商店などもあり、地域の人々の行き交う姿が頻繁に見られる。仲屋の行政区は西仲宗根にもまたがっている。

旭には、尻間（一部）・アコガ（一部）・白川（スサカー）・ウヤキヤ・東橋（アガイバズ）・赤宇下（アコースタ）（一部）などの小字がある。宮古島市立北小学校と隣接している住宅地で、子どもたちの姿をよく見かける。以前は県立図書館宮古文館があったが後に廃止（2010 年）、その後宮古島市立図書館北文館となったが閉館となった(2017 年)。行政区内には、株式会社八千代バス・タクシーもあり、地域の人々の生活を支えている。

高阿良には、平立（ピサダティ）・高阿良・土川（ンタガー）・東座・赤宇下（一部）・尻阿底（一部）などの小字がある。ウリガー（降り井）のイザガーがあり、周辺にはアパートやマンション、保育園や畑があり、静かな住宅地で緑も多く見える。

東川根には、大ホゴモリ・東川根・北ノ底（ニススク）・尻阿底（一部）・寺（ティラ）フグ・ニヤツ（ニャーツともいう）・竹原（タキバル）・ソデ山などの小字がある。4 つの行政区の中で一番大きな行政区であり、4 つの区に分けられている。ウリガーの盛加ガーや、盛加越公園があり、御嶽なども点在していて、緑の多い地域でもある。保育園やこども園、幼稚園、小・中学校や県立高校もあり、ショッピングセンターもあることから、普段から交通量も多く、地域の人はもとより、観光客の姿も多く見られる。

（2）自治会について（東川根）

東仲宗根で一番大きい地区である東川根には、自治会が存在する。

自治会は、1980（昭和 55）年 6 月に“ぬくもりのある自治会づくり”を目指して設立

された。活動の拠点となる「自治会館」は旧東川根保育所を宮古島市より無償で譲り受けたもの（2010 年）であり、看板には「東川根自治会館～ぬくもりの里～」と書かれている。

東川根自治会では、行政区とは別に、３つの区に分かれており、各区４～８班で細分化されている。自治会には自治会長１名、副会長３名、総務１名、副総務１名、会計１名、監査２名がおり、理事として各班の代表者たちがいる（１区：４名、２区：７名、３区：８名）。

自治会を構成する自治会員は、東川根地区に住む 400 世帯の住民たちである。自治会は、地域をよりよくするため、また全世帯の住民に自治会員となってもらえるため、日々様々なボランティア活動やイベント等を行って住民との交流を図っている。また、2003（平成 15）年の 6 月に「東川根自治会パトロール隊」を発足し、毎月パトロールを行って地域の防犯課活動や交通安全を努めてきたことが評価され、2010（平成 22）年「防犯功労団体」として、県警本部より表彰された。

主な年間行事は以下のとおりである。

１月　新春グランドゴルフ大会＆ちびっ子マラソン大会
４月　トライアスロン大会前大清掃
６月　グランドゴルフ大会＆定期総会
８月　自治会夏祭り
11 月　敬老会　（『東川根自治会創立 30 周年記念誌』より）

東川根自治会館入口

東川根自治会館

（３）東仲宗根の御嶽について

ここでは、調査者が東仲宗根を歩いて見つけた御嶽についてまとめる。御嶽の名前や祭神の名前は『平良市史』９巻を参考にした。

①仲屋御嶽

祭神　仲屋金盛豊見親

南東　127°

北緯　24°48′27″

東経　125°16′54″

高度　20m

現在も使用されている跡あり。

石積&コンクリートの壁で囲われている。民家が隣接している。香炉は南東 127°の方向に向いている。近所の方の話では、現在も仲屋のサトウタキ（以後里御嶽）として拝まれているそうだ。祭神は仲宗根豊見親の長男である仲屋金盛豊見親である。

＊「サトウタキ（里の御嶽）」とは･･･

「里（サト）と呼ばれる小区域で崇拝される＜里ウタキ＞」のこと（『沖縄大百科事典』中）。里は、「いわゆる隣組のごとき世帯の集合」（『平良市史』7）であり、「それぞれの里ウタキに里の神を祭り、そこで行事を行って」（同前）きた。しかし、現在は里の意識が薄くなってきており、それに伴い里ウタキでの行事は年々少なくなってきている（里によって差はあるだろう）。

②仲屋まぶなり御嶽

祭神　仲屋真保那璃（まぶなり）

北東　48°

北緯　24°48′27″

東経　125°16′54″

高度　20m

現在も使用されている跡あり。

①の御嶽の道沿いにあり、民家と民家に挟まれるようにしてある。祭神は①の祭神でもある仲屋金盛豊見親の一人娘、仲屋真保那璃である。「綾道（平良北コース）」には、「まぶなりは、父の罪を背負い、王府に召し使われ、中山王の寵愛を受けて妊娠しますが、周囲の宮女たちに激しく嫉妬されます。その嫉妬に耐えかね、宮古島に帰る途中、船頭に乱暴されて海に投げ出され、多良間島の浜に漂着し、域を引き取りました。」とあります。この御嶽は、

「真保那璃の霊に導かれて、生まれ育ったところに御嶽を仕立てた」そうだ（『平良市史』９）。

＊「父の罪」とは･･･

真保那璃の父仲屋金盛豊見親は、家臣の言うことをきいて、「城辺友利の金志川那喜多津（きんすきゃーなきたつ）豊見親を殺し、王府からその罪を問われて自害」した（「綾道（平良北コース）」）。

③イスキャー御嶽

北東　37°

北緯　24°48′31″

東経　125°16′54″

高度　30m

現在も使用されている跡あり。民家に隣接しており、敷地も広いので道を歩いていると目につきやすい。道路に祠が背を向けるようにして立っている。周りの壁、地面、祠全てがコンクリートで作られている。近所の方によれば、昔改築される前は、御嶽の周囲には木がたくさんあったそうだ。この御嶽は里御嶽として拝まれているという。

④外間御嶽

祭神　男神・祢間大按司　根間津のかわら

北東　29°

北緯　24°48′27″

東経　125°16′56″

高度　20m

現在も使用されている跡あり。近所の方の話では、以前は「大きな森のような御嶽だった」そうだが、旧北市場の建設や道路拡張などに伴い、「どんどん小さく端っこに追いやられた」ようだ。道路も広く、近くには商店などもあるので、人通りが多く、目立った場所にある。「雍正旧記」（1727 年）によれば、外間御嶽は祭神の祢間大按司、その子根間津のかわら、その子目黒盛（14 世紀後半に宮

古島を統一した人物)、その子真角与那盤、その子普佐盛（仲宗根豊見親の祖父にあたる人物）の５代の墓であるそうだ。普佐盛の弟である伊かりが、龍宮界から「鼓祢り（コネリ、コネイリ)」という祭りを伝授され墓所の周りに草木を植えて御嶽にしたという。

この鼓祢り祭は、いつまで行われていたかは不明だが、現在は行われていない。

御嶽には、５人の子孫や地域の人々が拝みに来るということだった。

⑤忠導氏仲宗根家裏の御嶽

南東　138°

北緯　24°48′30″

東経　125°16′55″

高度　20m

現在も使用はしているようだ。

忠導氏仲宗根家の裏にある御嶽。里御嶽だそうだ。話によれば、以前は御嶽には簡単に入れなかった。もともと御嶽のことを仕切ってくれていた方がいなくなり、次の方も今は宮古にいないので、近所の方々がお正月が近づいてくると掃除をしているそうだ。大体 50 年くらい前までは、ダキマス（御嶽に赤ちゃんが生まれた報告と御礼）などを盛大にしていた。いつからか御嶽での行事がなくなっていったという。

現在は、近所の方がお正月に清掃をしてお参りをしているということだった。

⑥仲屋金盛みゃーか

祭神　仲屋金盛豊見親

北東　37°

北緯　24°48′27″

東経　125°16′58″

高度　20m

現在も使用されているかは不明。

コンクリートの壁に囲われている。祭神の仲屋金盛豊見親は仲宗根豊見親の長男で、平良の頭職についたが、前述したように罪を犯して王府のとがめにより自害したということで、忠導氏を継いでいない。以前は「ウガンの日には隣近所五、六世帯で金を出し合って拝んで」いたそうだ（同前)。

⑦ユーラジィ御嶽

祭神　ユーラミガガマ
（女神）

南東　137°

北緯　24°　48′　28″

東経　125°　16′　60″

高度　20m

現在も使用されている跡あり。

この御嶽一帯は、かつて東仲宗根村番所があったといわれている。ユーラジィには「この御嶽の四辻で結婚する前にユーラ（夕方の占い）を行い、道行く人の話が良い話であればその結婚を吉とし、反対の良くない話が聞かれた時は凶とした」という話が言い伝えられている（『平良市史』９）。この御嶽は、里の人々が拝んでいるそうだ。

⑧ムテヤガーラ御嶽

祭神　ムテヤガーラ

北東　55°

北緯　24°　48′　27″

東経　125°　17′　0″

高度　20m

現在は使用されていないように見える。

周囲に石垣の壁はあるが、崩れたり隣接する建物の壁としてコンクリートに埋まっている部分がある。草木が繁茂し中に入ることはできない。辛うじて奥のほうに香炉や湯飲みが見える。

『平良市史』９巻によれば、ムテヤガーラは「あやさびふ」（宮古上布）を創製したといわれる稲石の夫のことだという。里御嶽として人々に拝まれていたそうだ。

⑨ウィピャー御嶽

北　342°

北緯　24°　48′　30″

東経　125°　17′　4″

高度　20m

現在も使用されている跡あり。隣に古い井戸がある。以前はそのつるべかけの柱に「白川里組合井戸、昭和五年四月建設」(『平良市史』９）と刻まれていたようだが、現在はそのような柱はない。里御嶽として拝まれている。

⑩アラヤートゥクル

祭神　砂川恵隆
東　　74°
北緯　24°48′32″
東経　125°17′8″
高度　20m
現在も使用されている跡あり。
敷地も祠もとても綺麗で新しい感じがする。祠の隣には碑が建てられており、碑の裏側には砂川恵隆氏の功績が記されている。アラヤーは屋号であるらしく、氏の生まれ日である旧暦の９月９日には一族が集まり拝んでいるそうだ（『平良市史』９）。

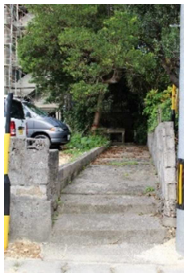
⑪ウガンガマ御嶽

祭神　女神
北東　51°
北緯　24°48′26″
東経　125°17′9″
高度　20m
現在も使用されている跡あり。
開けた広い場所に現れる。周囲は木々で囲われているが、中はきれいに草が刈られている。里御嶽として、地域の人々に拝まれているという。この御嶽には、次のような由来が伝えられているそうだ。「むかし、シーバラヤドウに美しい女の人が髪を洗って竿に干していた。すると、天の神様が、その女の人を見染められて、天に引き上げていった。」(『平良市史』９）

⑫イザガー御嶽

祭神　テンテククチョウの主
　　トビトイシュウ、アイノ主

クンノ主、八重山神



北東　30°
北緯　24°48′21″
東経　125°17′2″
高度　20m
現在も使用されている跡あり。
ウリガーのイザガ―の向いにある。かつてはイザガ―の上のほうに設置されていたようだ。細長い通路を通ると祠がある。周りには木々が植えられていて、きれいに清掃されていた。現在も里御嶽として地域の人々に拝まれているそうだ。

⑬大俵御嶽

祭神　イキノウスリノウウプドノ
近所の方からここに御嶽があるということを教えていただいたのだが、道が見つからず、御嶽に生えているという大きなヤシの木だけを確認することができた。『平良市史』９巻と照らし合わせると大俵御嶽であった。今後の調査で再確認したい御嶽であるが、現在も使用されているのかは不明だということだった。

⑭キンスカー御嶽（異称：トゥン主が御嶽）

祭神　金志川豊見親
東　74°
北緯　24°48′26″
東経　125°17′11″
高度　20m
御嶽があることを教えていただいたが、道が見つからず、隣接する電気水道工事社から覗かせてもらい確認をした。以前工事社の方が清掃等を行っていたらしいが、現在この御嶽を拝んでいる人はいないと思う、ということだった。
『平良市史』９巻によれば、中にはコンクリート製の祭壇が設けられており、そこに香炉があるそうだ。
また、この御嶽の祭神である金志川（キンスカー）豊見親は、前出の仲屋金盛豊見親に殺された金志川那喜多津（なきたつ）豊見親のことである。屋敷跡が城辺の友利にあり、金志川豊見親はそ

この御嶽に祀られているのだが、かつてその御嶽を拝んでいた人たちが、この地域に住み着くようになり、遥拝所としてキンスカー御嶽を設置したといわれているという。

⑮御嶽ガマ

北西　310°
北緯　24°48′17″
東経　125°17′5″
高度　20m
現在は使用されていないように見える。

周りには木々が多くあり、静かに佇んでいる。中には香炉のような石がある。

⑯盛加御嶽

祭神　盛加神
（島内守護神）
北東　51°
北緯　24°48′18″
東経　125°17′10″
高度　20m
現在も使用されている跡あり。

前出の東川根自治会館や市指定の文化財（史跡）にも指定されている盛加ガー（ウリガー）に隣接している。敷地は石垣で囲われており、入口には鳥居が設置されている。通路を歩いていくとコンクリート製の祠があり、香炉が置かれている。
この御嶽の祭神である盛加神（もりかのかみ）は、宮古を創世したといわれている古意角・姑依玉の神と共に島に降り立ち、勇武をふるって島の中にいた鬼たちを押し鎮めたそうだ（『平良市史』９）。島の守護神として現在でも地域関係なく多くの人々に拝まれている場所でもある。

⑰大親主のトゥクル

祭神　平良大親（恵草・恵賓）、砂川大親（恵忠）
NTT に隣接している。草木が繁茂して駐車場

にせり出しているものの、御嶽の木なので伐採できずに放置されている。以前はよく拝みに来る方が見えていたが、最近はあまり見かけないとのことだった。御嶽は、ブロック塀で囲われており、扉が付いていて鍵がかけられ中の様子をきちんと見ることが出来ない。

『平良市史』９巻によれば、NTT の敷地は元は祭神である大親主の屋敷跡で、御嶽はその子孫によって拝まれているそうだ。

⑱アガズギー御嶽

祭神　アイの主
　　クンの主
北東　49°
北緯　24°　48′　10″
東経　125°　17′　9″
高度　20m

現在も使用されている跡あり。

この御嶽は、里御嶽だそうで近所の方々が拝みに来るそうだ。住宅地の中にひっそりとたたずんでおり、きれいに掃除されていた。

⑲ニャーツウリガー（洞井）

祭神　水の神
北　　10°
北緯　24°　48′　17″
東経　125°　17′　25″
高度　20m

現在も使用されている跡あり。

小さい公園の中に、コンクリートで固められている場所があり、香炉があった。

この場所は戦前、ニャーツの方々の生活用水として利用されていたウリガーである。

しかしニャーツからは遠く、戦後、別の場所に井戸が掘られ埋め立てられたそうだ。

その後は、ニャーツの人たちがシツの時に拝んでいるという（『平良市史』９）。

＊「シツ」とは？

『平良市史』９巻によれば、シツとは「旧五月六月の甲午の日から翌日に亘る節句」のことで、人々は「この夜、無病息災、農事豊作を祈り、シナ（貝）の吸い物をいただく。翌日は未明に「若水」を浴びて身をきよめる」。

⑳ニャーツガー（井戸）

祭神　水の主
東　　74°
北緯　24°48′20″
東経　125°17′29″
高度　40m

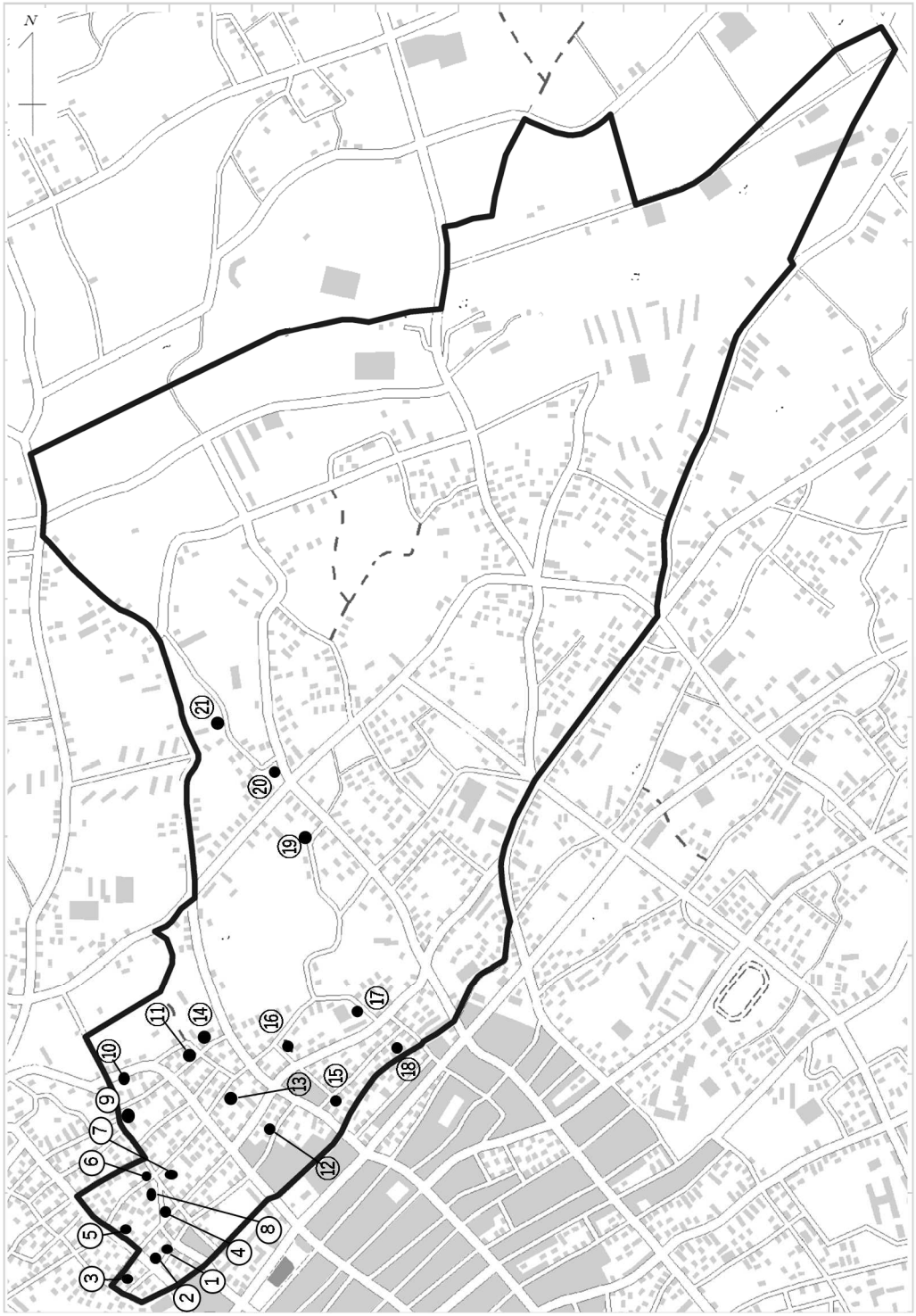
現在も使用されている跡あり。
コンビニエンスストアと薬局の駐車場の隅に井戸があり、その角の方に香炉がある。この場所は、戦後掘られた井戸で、ニャーツの人々の生活用水として利用されていた。以前は、つるべかけに掘られた年などが刻まれていたそうだが、現在はつるべかけは折れている。この場所も、ニャーツの方々によってシツに拝まれているようだ。

㉑ニャーツ御嶽

ⅰ　北東　50°
　　北緯　24°48′20″
　　東経　125°17′30″
　　高度　40m
ⅱ　西　　284°
　　北緯　24°48′20″
　　東経　125°17′30″
　　高度　40m

現在も使用されている跡あり。
周りに木々が繁茂しており、中にブロックが円を描くようにして置かれている。
目視でだが、香炉が２ヵ所に置かれていた。しかし、『平良市史』９巻にはさらに３つの香炉があるようで、もっと詳しく調べる必要がある。東仲宗根の御嶽の中で一番広い御嶽のように思われる。

【御嶽位置図】



おわりに

今回は実際に地域を歩いて、どこに何があるのかを見ながら調査を行った。

行政区の調査では、同じ字の中でも、地区によって雰囲気が違ったり、御嶽の密集度が違うことが分かり、古い集落なだけに各所にまつわる歴史や伝説の多さにも驚いた。

自治会の調査では、字で唯一の東川根自治会を調査したが、未登録の自治会にもかかわらず積極的にイベントやボランティア活動を行っており、よりよい地域作りに力を注いでいる自治会であった。今後の動きにも注目していきたい。

御嶽の調査では、実際に歩いて発見したり、地域の方々から情報をいただいて探した御嶽を『平良市史』９巻を参考にまとめたが、当時の調査で記載されている御嶽が今日姿を消していたり、また見つけることが出来なかったりと 25 年の年月を経て変わってきた東仲宗根の姿も垣間見ることができた。それと同時に、人々の御嶽離れという課題も見えてきた。

東仲宗根では、「集落の御嶽」よりももっと規模の小さい「里御嶽」の方が地域の方々に密着しており、私が勝手に描いていた御嶽での行事を司るいわゆる神役組織を見出すことは出来なかった。今後の調査では、人に焦点を当ててライフヒストリーを中心に情報を収集していき、年中行事や人生儀礼、東仲宗根の様子など昔から現在への変遷を紐解いていき、写真や思い出の品など、貴重な資料となりうるものも発掘できればと思う。

〈謝辞〉 今回の調査では、行政連絡員の方々や東川根自治会の方々、東仲宗根の皆様に貴重なお話や情報を教えていただき、大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

【参考文献】

1983（昭和 58）年　『沖縄大百科事典』中巻　沖縄大百科事典刊行事務局編集
沖縄タイムス社・発行

1987（昭和 62）年　『平良市史　民俗・歌謡』第７巻　平良市史編さん委員会編集
平良市教育委員会発行

1994（平成６）年　『平良市史（御嶽編）』第９巻　平良市史編さん委員会編集
平良市教育委員会発行

2010（平成 22）年　「講座用教本　御嶽由来記・雍正旧記・宮古嶋記事」　砂川玄正翻刻

2011（平成 23）年　『東川根自治会創立 30 周年記念誌』
東川根自治会創立 30 周年記念事業・実行委員会編集・発行

2014（平成 26）年　宮古島市 neo 歴史文化ロード「綾道（平良北コース）」
宮古島市教育委員会編集・発行

３．盛加が一の自然（砂川、久貝）

東仲宗根の東川根地区に所在する盛加が一の植物の調査を実施したのでその報告をする。この調査は 2018 年 10 月から 2019 年 1 月にかけて、東仲宗根の自然調査の一環として水道整備事業以前まで周辺住民の生活に欠かすことのできなかった盛加が一（洞井）で植物調査を実施した。

調査地の植生概況

盛加が一は宮古島市役所の東 500mの住宅地域内に開口している。洞口は、径 23mの陥没ドリーネで、洞口から洞内の地下水面までは約 18mの落差があり、石灰岩の層理に沿って落盤した岩体の上を螺旋状に階段を降りていく。ウリガー特有の湿地帯を好むシダ科の植物やポトスの名で観葉植物としても有名なオウゴンカズラの繁茂がみられる。

写真 1　盛加が一入り口

写真 2　盛加が一洞内

調査方法

盛加が一一帯を踏査し、植物調査を実施した。また、盛加が一は 1975（昭和 50）年に平良地区の市指定史跡に指定のため、植物の採取は行わず写真記録のみを行った。

調査結果

盛加が一周辺の植物は、シダ植物 5 科 6 種、種子植物のうち裸子植物 1 科 1 種、被子植物のうち双子葉植物は 12 科 17 種、単子葉植物 5 科 8 種計 23 科 32 種が確認出来た。調査前はシダ植物が多く生息しているだろうと予想していたが、洞口周辺で成長した草木の種子が発芽し、洞内でも観察することが出来た。

また、外来種であるオウゴンカズラの生命力は凄まじく、在来の植物を被覆してしまい在

写真３　繁茂しているオウゴンカズラ

来植物の生育を妨げる要因になっているように思える。

今回の調査は 10 月から翌年の 1 月までの 4 ヶ月という短い期間であり、1 年を通しての調査であればさらに種数が増えるであろうと思われる。次年度以降については植物の継続調査や、今年度は対象外だった昆虫や鳥類、オウゴンカズラなどの外来生物についても調査していきたい。

調査結果を植物目録として以下に示す。目録には、科名、学名、種名を記した。

盛加が一の維管束植物目録

Pteridophyta　シダ植物

Pteridaceae　イノモトソウ科

Pteris ryukyuensis Tagawa　リュウキュウイノモトソウ

Davalliaceae　シノブ科

Nephrolepis biserrata (Sw.) Schott　ホウビカンジュ

Aspidiaceae　オシダ科

Tectaria devexa (Kunze) Copel.　ウスバシダ

Thelypteris acuminata (Houtt.) Morton　ホシダ

Aspleniaceae　チャセンシダ科

Asplenium australasicum (J.Sm.) Hook.　ゴウシュウタニワタリ

Polypodiaceae　ウラボシ科

Microsorium dilatatum (Bedd.)Sledge　ホコザキウラボシ

Spermatophyta　種子植物

Gymnospermae　裸子植物

Podocarpaceae　マキ科

Podocarpus macrophyllus (Thunb.) Sweet　イヌマキ

Angiospermae　被子植物

Dictyledoneae　双子葉植物

Archichlamydeae　古生花被区

Moraceae　クワ科

Ficus microcarpa L. f.　ガジュマル

Ficus superba (Miq.) Miq. var. japonica Miq.　アコウ

Morus australis Poir.　ヤマグワ（シマグワ）

Urticaceae　イラクサ科

Boehmeria nivea (L.) Gaudich.

f. viridula (Yamam.) Hatusima, comb. nov.　ノカラムシ

Leguminosae　マメ科

Leucaena leucocephala(Lam.)de Wit　ギンネム

Oxalidaceae　カタバミ科

Oxalis corniculata L.　カタバミ

Euphorbiaceae　トウダイグサ科

Breynia vitis-idaea (Burm. f.) C.E.C. Fischer　オオシマコバンノキ

Macaranga tanarius (L.) Muell.Arg.　オオバギ

Melanolepis multiglandulosa (Reinw.ex Bl.) Reichb. f. & Zoll.　ヤンバルアカメガシワ

Celastraceae　ニシキギ科

Maytenus diversifolia (Maxim.) Ding Hou　ハリツルマサキ

Elaeocarpaceae　ホルトノキ科

Elaeocarpus sylvestris (Lour.) Poir.　ホルトノキ

Guttiferae　オトギリソウ科

Garcinia subelliptica Merr.　フクギ

Passifloraceae　トケイソウ科

Passifxlora suberosa L.　ミスミケトケイソウ

Metachlamydeae　後生花被区

Boraginaceae　ムラサキ科

Carmona retuxsa (Vahl) Masamune　フクマンギ

Cucurbitaceae　ウリ科

Diplocyclos palmatus (L.) C.Jeffrey　オキナワスズメウリ

Compositae　キク科

Bidens pilosa L. f.*decumbens* Sherff　ハイアワユキセンダングサ

Lactuca indica L.　アキノノゲシ

Monocotyledoneae　単子葉植物

Pandanaceae　タコノキ科

Pandanus odoratissimus L. f.　アダン

Gramineae　イネ科

Miscanthus sinensis Anderss. var. gracillimus Hitchc.　イトススキ

Oplismenus compositus (L.) Beauv.　エダウチチヂミザサ

Palmae　ヤシ科

Livistona chinensis（Jaq.）R. Br. ex Mart.
var. subglobosa（Hassk.）Becc.　ビロウ
Phoenix roebelenii O'brien　シンノウヤシ

Araceae　サトイモ科

Alocasia odora（Lodd.）spach　クワズイモ
Rhaphidophora aurea（Lind. ex Andre）Birdsey　オウゴンカズラ

Zingiberaceae　ショウガ科

Alpinia formosana K. Schum.　クマタケラン

【参考文献】

沖縄県教育委員会　1980　『沖縄県教育委員会沖縄県天然記念物調査シリーズ第 19 集　沖縄県洞穴実態調査報告Ⅲ』　p. 19
（財）海洋博覧会記念公園管理財団　2007　『沖縄植物図鑑』
池原直樹　1979　『沖縄植物野外活用図鑑　第 1 巻　栽培植物と果樹』新星図書出版
池原直樹　1979　『沖縄植物野外活用図鑑　第 2 巻　栽培植物』新星図書出版
池原直樹　1979　『沖縄植物野外活用図鑑　第 3 巻　帰化植物』新星図書出版
池原直樹　1979　『沖縄植物野外活用図鑑　第 4 巻　海辺の植物とシダ植物』新星図書出版
池原直樹　1979　『沖縄植物野外活用図鑑　第 5 巻　低地の植物』新星図書出版
池原直樹　1979　『沖縄植物野外活用図鑑　第 6 巻　山地の植物』新星図書出版
池原直樹　1989　『沖縄植物野外活用図鑑　第 7 巻　シダ植物～マメ科』新星図書出版
植村修二、勝山輝男、清水矩宏、水田光雄、森田弘彦、廣田伸七、池原直樹　2010　『増補改訂　日本帰化植物写真図鑑　第 2 巻』全国農村教育協会
初島住彦、天野鉄夫　1994　『琉球植物目録』沖縄生物学会

４．現代東仲宗根の作家たち（新田）

宮古島市総合博物館では「現代宮古の作家たち」と題して、宮古在住、出身の美術作家の作品を企画展示しているが、これも平成 28 年度に第 10 回を数えた。この度、字調査として東仲宗根を限定的に調査することとなり、美術工芸班は東仲宗根在住、出身の美術作家に取材を行った。当館の歴史ある企画展に倣って「現代東仲宗根の作家たち」として２人の作家について報告する。

佐渡山政子さん

〇宮古高校美術クラブで基礎を学ぶ

佐渡山政子さんは旧城辺町の新城に生まれ、福嶺小学校に入学したが、６年生の２学期から北小学校に通った。高校時代は、宮古高校美術クラブに入部し、顧問の儀間先生の指導の下、美術の基礎を学んだ。儀間先生からはまず、アグリッパやヴィーナスなどの石膏デッサンを指導された。デッサン紙に木炭で描き、食パンで消す、といった本格的な方法だったという。食パンの耳をかじりながら練習して、基礎を身につけた。

当時は美術クラブの日誌をつけていて、現在もそのうちの１冊を大切に保管している。１学年上には、「彩の会」の宮国博文さん、陶芸家の吉村明さん（部長）、本島在住の伊波盛光さん、京都在住の建築家・下地良和さんらがいた。この先輩たちは、とても仲がよく、チームワークがよかった。１学年下には長野県在住の彫刻家・伊波文三さんが、また、４学年下に与那覇淳さんがいて、同じ時期に在校・在部してはいなかったが、与那覇さんは後に佐渡山さんに、「佐渡山さんのことは美術クラブの日誌を見て知っていた」と話したのだという。

〇新聞社勤務

高校卒業後は、東京の千代田デザイナー学院でインテリアを学んだが、その職業には就かなかった。

宮古毎日新聞社に就職。30 年間勤め、３回辞職、３回再就職した。佐渡山さんが記者とし

て働いていた当時は、パソコンもなく、原稿用紙に手書きで記事を書いた。郷友会の人物紹介や、「島に生きる」いうコーナーなどを手がけた。

○宮古の民話やことわざの世界

宮古民話の会では、宮古での民話収集にくわえて、本島での調査も行った。「民話やことわざの世界は、自分にとって大事。これだけは外せない」と話す。子どもの頃からおばあちゃん子だったため、すぐにその世界に入ることができた。それまでは油彩画を描いていたが、民話の挿絵を描くため佐渡山さんの作品は次第にイラスト風になっていったという。

「水牛」(1983 年)

油彩・キャンバス　455 cm×606 cm

「ヨナタマ伝説」(1995 年)

アクリル・キャンバス　1267 cm×803 cm

「シヌグ」(2015 年)

アクリル・キャンバス　500 cm×652 cm

2018年６月には、筑波大学の「リングアパックス（Linguapax Asia 2018)」のシンポジウムに参加。英語で話すアジア各国の参加者の中、佐渡山さんだけがみゃーくふつで宮古の民話を読み上げるなどした。

「日本の教育を受けてきて、地元のことをあまり知らなかった。地元に素晴らしい文化があるということは自分の“核”になるし、それをしっかりととらえている人は何事にも動じないと思う」と話す。佐渡山さんの作品には、宮古の風景や祭祀、人物などが描かれ、脈々と口承される世界観を表現している。宮古の民話や伝承を後世に伝えたいという佐渡山さん自身の“核”がその絵には見て取れるのである。

島袋正弘さん

〇宮古高校美術クラブから東京のすいどーばた美術学院へ

東京藝術大学を目指していたが、受験に失敗。すいどーばた美術学院という美術の予備校に通った。その後別の大学に入学するも、肌に合わず退学した。

〇戻るつもりのなかった宮古へ

宮古に戻るつもりはなかったが、親に呼び戻され帰郷。

30歳頃からＴシャツ専門店「PAPAYA」を夫婦で経営し、Ｔシャツのデザインから制作、販売までを生業とする。

会社や役所などの組織で働いたことはなく、自分はそういったところとは無縁であると考えているが、机を並べて仕事する「勤め人」にある種の憧れもある。自営業の自分だけがいつまでも変わらず、周りの友人たちが偉くなっていくのを見ていると感じることもある。

〇アートの本質は「続けること」

若い頃から描いていた絵を、一度はやめた。

自分が絵で表現しようとしたことは、過去の作家たちがほとんどやっていて、もう、絵の中ではやることがないと感じた。若いときは夢を持って絵を描いていたが、映像にしても、環境芸術にしても、いいものは出尽くしている、と。しかし、やはり人生において何かを探求していかなければならないと考え、再び絵の世界に戻った。

平面の上に単純に何かを形作っていく、それがいつかものになればいいと思いながら創作を続けている。風景を美しく描くのではなく、平面に感性そのものを表現していく。ただ、島の中にいると、環境が閉鎖的で外からの刺激が少なく、感性が落ちていくのを感じていらだちを覚えることもあるという。

島袋さんは、「アートの本質は続けること、才能とは創作を続けること」だと話す。大抵の人は日々の生活に追われ創作を続けられないが、そんな状況の中でも、創作を続けることの大切さを訴える。

島袋さんの作品は「感性の柔らかい破裂」だと感じる。平面に油絵の具で抽象的に表現されたそれらの作品からは、激しさの中にある柔らかさ、あるいは柔らかさの中にある激しさを感じるのだ。

長年、絵画サークル「二季会」で活動している。最近は若い会員、新しい会員たちが精力的に作品を制作していて頼もしい。今は本業に力を入れなければならないが、現役を引退すれば楽しく創作できると思う、と話す。

「静物」(1975 年頃)

油彩・キャンバス　909 cm × 727 cm

「無限」(2015 年)

油彩・キャンバス　727 cm × 606 cm

名古屋出身の妻とは、宮古で知り合った。結婚した理由のひとつは、「混ざることによって新しいもの、新しい文化が生まれるのではないかという期待」。その結論はまだ出ていないというが、島袋さんのいつまでも新鮮な感性は、異文化と混ざることによって生まれたものなのかも知れない。

まとめとして

創作活動を続けている方々のお話を伺うと、宮古高校美術クラブのことがよく挙げられる。特に佐渡山さんたちの年代の方々は、高校時代から熱心に創作に取り組まれ、その創作意欲が長年持続しているようにお見受けする。そして、その伝統は旧制宮中時代にまで遡るのではないだろうか。

旧制宮中で宮原昌茂先生（図画教師）、篠原国堅（鳳作）先生（英語と公民の教師）、慶徳健先生（地歴と剣道の教師）らは、美術教師として学生たちを熱心に指導した。彼らの指導を受けた学生たちが中心となって結成された絵画サークル「二季会」には、下地明増氏、本村恵清氏、平野長伴氏、池村恒仁氏、大宜見猛氏、下地充氏、川満進氏、砂川隆之氏らがいた。また、その後も、「青の会」や「彩の会」が結成されたし、グループに属さず個人で創作する作家も多く、宮古の美術界は活気に溢れていた。本土や本島と違い、情報や材料も入手しづらい離島において、戦前から現在まで、アートを求める人たちは後を絶たなかった。

佐渡山さんも島袋さんも、それぞれ本業を持ちながら創作活動を続けてきた。生活と創作は、人が思う以上に異質で、正反対に位置するものである。島袋さんのお話にもあるように、「アートの本質は続けること」であるとするならば、生活を保ちながら創作を続ける困難さの中で生み出された作品は、作家それぞれの“核”であり、また、アートそのものではないだろうか。

東仲宗根出身、在住の美術・工芸作家については、今後も取材を行っていきたい。東仲宗根に限らず、宮古には創作活動を続ける美術・工芸作家が多くおられる。範囲を広げて取材を続けていきたい。

謝辞

佐渡山政子さんも島袋正弘さんも、お仕事でお忙しい中、時間を作ってお話を聞かせて下さいました。作品や創作のことだけでなくご家族やご友人のことなどもお話し下さり、とても楽しいひとときを過ごさせていただきました。心より感謝申しあげます。

宮国博文さんを悼む

本稿執筆中、文中にお名前の挙がった宮国博文さんの訃報を耳にしました。

私は宮国さんとは二度しかお目にかかっていません。平成 24 年度の第 23 回企画展「現代宮古の作家たちⅨ」に出品していただいた時と、入院されていた病院にお見舞いに伺い、作品についてご教示を賜った時です。たった二度の面談でしたが、宮国さんは私に強烈な印象を残しました。というのも、私がお話を伺った時にはすでにお体を悪くされていたにもかかわらず、若い頃の情熱と行動力に溢れたお人柄を残しておられたからです。そんな印象を受けたのは周囲の方々からの“宮国博文評”も手伝ったかも知れません。

「大樹」　宮国博文作

アクリル・キャンバス　803 ㎝×1167 ㎝

宮国さんの絵は、繊細なタッチと色使いで宮古の風景を描いた作品が多く、どこかで見たような、でも初めて見るような、そんな不思議な感動を与えてくれます。

いくつかの作品は市内で観ることができます。ホテルサザンコーストのロビーにある「夫婦松林」は第 23 回企画展「現代宮古の作家たちⅨ」の際にお借りして展示しました。沖縄銀行のロビーには「懐（ピンフ岳)」が展示されています。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

おわりに

今回の紀要への執筆は、１年を通して係の大きな課題でもあった。学芸係の大きな仕事のひとつである調査・研究は、日々の業務に追われている私たちにとって実行はしているものの、中途半端に終わらせてしまうことも多々あるものであった。今年度は係で東仲宗根を多方面から調査していき、その結果を紀要で報告しようと決め、１年間取り組んできた。しかし、日々の業務をこなしながらの調査は、最初に計画していたものにはならず、ひとりひとりが悩み苦しんだ。満足のいく調査とはならなかったものの、「１年かけて調査した報告をする」ことに意味があると思い、なんとかここまでたどり着くことが出来た。

各々が今後の課題を見つけ、また次年度も実りある調査・研究が出来るように頑張っていくので、温かく見守っていただきたい。

なお、今年度私どもの調査研究にご協力いただいた全ての関係機関・地域の皆様に、学芸係一同、この場をかりて心より感謝申しあげます。